

## 特集／アジア地域関連コレクション—わが国主要図書館の所蔵資料から

# 山口大学東亜経済研究所所蔵資料

大林洋五

山口大学経済学部内に東亜経済研究所がある。これは、旧制山口高等商業学校（以下、山口高商と略）時代からの遺産であるが、制度化された研究所ではなく、経済学部の内部措置によって運営されており、独自の予算はない。また、専任研究員もなく、すべて学部・大学院の教員の兼任である。

明治三八（一九〇五）年、旧・旧制の山口高等学校を改編・設立された際、山口高商の指針は、

一、徒に深遠なる空理に馳せず、実際に重きを置く、

一、卒業生を成るべく満・韓・支地方の実業に従事せしむ

というものであった。この指針は、カリキュラムばかりでなく、収書構成にも現れている。まず、旧帝大、旧制高校に比べて、洋書が極めて少ない。かわりに中国書が多い。それも、いわゆる漢籍ばかりでなく、当時の「時文」すなわち、清末・民初の雑誌などの資料が多い。

一九一〇～三〇年代には、没落した旧家から流出したであろう明代・清代の貴重本が買い入れられた。これらは、内容はポ

ピュラーだが、刊本が貴重なものがある。『康熙御製・耕織図誌』（佩文齋）、『後漢書』（明・汲古閣）など。内容では、地誌類から辺境のものや、また、北京周辺地域のものに、珍しいものがある。

民国初期の時代は、様々な政治勢力が乱立した時代であり、各種の団体も多様な雑誌、図書、パンフレットを発行している。

とくに一九二〇～三〇年代は、世界的に農村の疲弊が問題となっていた時代であり、中国農村問題関係のパンフレット類が集められており、その中に、毛沢東の『湖南農民運動考察報告』も含まれている。

一九三〇年代には、上海・商務印書館などから刊行（一部は編纂も）された中国古典類書、『正統道蔵』、『小方壺齋叢書』なども、当時購入している。これらの多くは、一九九〇年代に影印本が出版されているが、

### ●朝鮮関係

「満韓支」が守備範囲だったため、朝鮮関係の図書も、当初は購入した模様であるが、大正以降、ほとんどない。これは、政治的には一九一〇年の日韓併合、直接的に

は一九二四年の京城大学の設立、京城高商の設立などにより、山口高商の守備範囲ではなくなったと考えられたからであろう。スタッフには、兼任講師ながら、主任教授扱いであった稲葉若吉（君山）氏など、朝鮮研究のエキスパートもいたはずなのに。

朝鮮総督府傘下の各機関・団体の刊行物には、平壤税関（支所）の報告書、利川の農村金融組合の報告書、木浦商工会議所の月報などが、一九四〇年代まで所蔵されているが、周辺の同様な機関・団体のものは所蔵されていない。系統的、網羅的に集めたのではなく、それらの機関にいた卒業生が送ってくれたものであろう。

### ●満鉄関係

南満洲鉄道や、その関連団体などの刊行物もかなり多いが、その中で、満鉄調査部の編纂した大叢書も重要ではあるが、満鉄傘下の小営業所などの発行したパンフレット、小報告書―満洲農村の農家生活、各種作物の栽培状況、農村小市場の状況などについて―のようなものが、現在では、資料的価値は高いであろう。それらは、網羅的



## 特集／アジア地域関連コレクション—わが国主要図書館の所蔵資料から

に購入・交換したのではなく、相手方の好意によって送られた、とくにこれらの機関にいた卒業生から寄贈されたものが多い。

山口高商卒業生の三田了一氏は、満鉄調査部で中国のイスラム教徒の研究を始め、戦後は「ミイラ取りがミイラになって」、ハッジ（巡礼者）、イマーム（導師）となり、『日亜対訳・注解・聖クルアーン』の翻訳・注解者となった。三田氏は、満鉄調査部時代、自身の執筆した論文の掲載された刊行物もしくは抜き刷りを母校に寄贈しており、その点数は多い。

満洲の事情調査のうち、大連、撫順、鞍山などが多いのは当然として、東洋拓殖の出先機関や、総領事館発行の間島（延辺自治州）に関するものもある。また、興安局・興安総省（内蒙古自治区東部）の下部機関が弘報のために出したパンフレットや、謄写版印刷の報告書類も多くはないが、所蔵している。

華北では青島とその周辺が、第一次世界大戦中と直後、日本が占領したが、その際に行われた調査の報告書がある。

### ●東南アジア関係

満韓支が専門領域といっても、研究を独占できるはずもない。一九二〇年代末までには、官立（国立）の、「内地」だけで、二商科大学、一一高商が、似たような研究・教育を行っていたのである。そのため、日本の進出のために、当時関心を集めてい

る地域へ調査・研究範囲を拡大するのは、当然のことであった。

とくに南洋（東南アジア）研究も行われた。教育面では、一九二九年の貿易別科設置ごろから積極的となる。貿易別科の授業科目には、支那・南洋経済事情、支那・南洋地理、支那語、馬來語などがある。一九三九年から『支那経済年報』を刊行していたが、四一年には『東亜経済年報』と改題、四三年版は、『南方共栄圏号』としている。しかし、それにしても、東南アジアに関する資料は多くない。めぼしいのは、植民地宗主国である、イギリス、フランス、オランダ、アメリカなどの植民地行政の実態分析・解説くらいのものである。

東南アジア関係資料が本格的に購入されるのは、一九七〇年代に入って、専任教員が配置されるようになってからと言える。

### ●戦前の目録

第二次大戦までに集めた資料は、『紀元二千六百年記念・山口高等商業学校・東亜関係図書目録』に収録された。「和漢書分類之部」、「和漢書（著者名・書名・索引之部）」の二冊である。これは、一九四一年一〇月までに登録された資料である。以降、一九四五年までは、めぼしいものはない。当時、すでに「大日本帝国の領土」であった朝鮮、台湾は省かれており、洋書の目録もない。一九四五年敗戦直後、それまで国策に忠実であっただけに、責任追及におび

えたためか、東亜経済研究所を閉鎖した。学校幹部の中には、資料を焼却しようとする動きもあったというが、それはごく一部に止まった。まもなく、占領軍によって、資料を大量に接収された。その大部分は、後日返還されたが、返還されなかったものがある。図書は学校の備品であり、翌々年、備品の紛失・除籍の手続きが取られたが、その除籍図書の大部分は、この際に接収されたものであろう。この図書は、結局、アメリカ議会図書館に入ったようである。

東亜経済研究所は、一九五〇年代半ばに再開されたが、中国の大変革期に閉鎖を余儀なくされていたことは、再開後の関係者の努力にもかかわらず、この時期の欠落が大きいことで分かる。

一九七〇年代初め、明治以来の校舎を現在地へ他学部と統合移転することと、学部創立七〇周年とを記念して、卒業生など、関係各方面から寄付を募り、その一部が、東亜経済研究所の資料費に充てられた。しかし、肝腎の中華人民共和国は、当時、文化大革命期で、出版物が少なかった。そこでその資金は、当時、アメリカの各機関がアジア関係蔵書目録を（図書カードを並べて、そのまま版にとった）競って発行していたものを購入した。アメリカ議会図書館、カリフォルニア大学バークレー校、シカゴ大学、ハーヴァード大学、ミシガン大学、スタンフォード大学などである。

清末、民初の政府官報などを、東亜経済

研究所は購読していたが、政権交替による発行の混乱に対応しきれず、欠番が多かった。一九七〇年代には、それらの影印版が台湾、香港で出版されていた。この影印版による、欠番補充もこの資金による（現在では、大陸でこれらの影印版が続々と出版されているが）。

東亜経済研究所の特色である、戦前の資料に対する学外からの問合わせは、『紀元二千六百年記念目録』によるものであるが、上記の事情で、目録に掲載されていないが、実物がないものも多く、もちろん新規の資料も多くなったので、目録を作り直す必要がでてきた。

## ●一九八一年目録

一九八一年三月現在の蔵書を『山口大学経済学部東亜経済研究所・東亜関係蔵書目録』（全五冊）として編纂した。

『和漢書分類目録』（一九八八年刊行）

『和漢書著者名索引』（一九八九年刊行）

『和漢書書名索引』（一九八九年刊行）

『中国語図書（著者名、書名）拼音索引』（二〇〇二年刊行）

（一九八九年刊行）

『洋書分類目録・（著者名、書名）索引』（一九八九年刊行）

欠点の多い目録ながら、これで一応は、蔵書の内容が、内部ばかりでなく、学外者にも把握できるようになったと思う。

## ●大林コレクション

この『目録』編纂中の一九八〇年代から中華人民共和国では、出版活動が爆発的に盛んとなり、多くの貴重な資料が刊行されている。山口大学も購入しているが、それは、他の機関・個人とくに変わったものではない。『目録』以降の特別な収書は、大林コレクションである。これは、元教員・大林洋五が、その蔵書を順次寄贈しているものである。このコレクションの特色は、『目録』にある、それまでの蔵書との重複が少なく、補完性が大きいことである。

一九五〇年代の中国の、また日本の中国研究グループの、日中団体の発行物が、比較的に多い。また、中国辺境・少数民族地区と周辺国家に関する資料に特色がある。地図、時刻表、便覧など実用品もふくむ。

## ●商品館

また、山口大学経済学部には、「商品館」と呼ばれる実物資料の収集がある。主として、明治末期から大正・昭和初期にかけての輸出商品の見本である。陶磁器、漆器などであり、ほとんどの物に当時の販売価格が明記されている。ほとんどは、関係者の寄贈による。中には、当時の最先端技術（試作品）―セルロイド、ベークライト、タイル、洋銀の洋食器など―も見本として納められている。

『山口大学経済学部商品資料目録』（一九八二年）

『山口大学経済学部商品資料目録（追

録』（一九八八年）

## ●資料の利用について

（以下、研究所事務室・金重幾久美係長による）本稿で紹介した資料は、貸出はできないが、閲覧と複写は可能となっている。来館される場合、原則として書庫内には入れないので、ウェブによる検索または冊子目録で検索の上、所定の用紙に記入して申し込む。メール等でも受付けており、事前にご連絡いただいとくと、効率的に閲覧できる。なお、資料の状態にもよるが、戦前期文献の多くが劣化しているため、できる限りデジタル撮影をお願いしている。

来館できない場合は、山口大学図書館に申し込み、有料の複写サービスを受けることができる。また、大林コレクションについては、大学図書館間の相互貸借を受け付けている。

研究所の利用時間は、月々金（祝日・年末年始を除く）の八時三〇分～一七時までである。

電話・〇八三一九三三―五五〇七

ファックス・〇八三一九三三―五五二〇

メール・[token@yangudiri-u.ac.jp](mailto:token@yangudiri-u.ac.jp)

郵便番号七五三―八五一四

山口市吉田一六七七一

山口大学経済学部東亜経済研究所

（おおよし ようご）元山口大学経済学部教員、現非常勤講師